

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

2024年 9月 11日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会長 藤 洋作 様

所属部局・研究科 文学研究科

職名・学年 博士後期課程 2年

氏名 石原 諒太

助成の種類	令和6年度 ・ 国際研究集会発表助成			
研究集会名	IAPDD(死と死にゆくことの哲学のための国際学会)の第六回隔年会議			
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 口頭 ・ <input type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他()			
発表題目	Death, Deprivation and Counterfactual Semantics			
開催場所	ポーランド・クラクフ・Jagiellonian University			
渡航期間	2024年 7月 30日 ～ 2024年 8月 26日			
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()			
会計報告	交付を受けた助成金額	350,000円		
	使用した助成金額	350,000円		
	返納すべき助成金額	0円		
	助成金の使途内訳	費目	金額(円)	
		航空運賃	137,236	
		宿泊費	167,383	
		滞在費	21,000	
		学会参加費	23,000	
その他		1,381		
	以上に助成金を充当			
当財団の助成について	いただいた助成金のおかげで充実した時間を過ごすことができました。心より感謝申し上げます。			

成果の概要／石原諒太

1. 研究集会について

今回報告者が参加したのは、死と死にゆくことの哲学のための国際学会（International Association for the Philosophy of Death and Dying）の第6回隔年会議である。本会議は2024年8月22日から24日の三日間にわたり開催され、北アメリカ、ヨーロッパ、そして日本から30～40名ほどの研究者が参加した。本会議では、死の定義、死刑の深刻さ、死の恐怖の合理性など、死と死にゆくことをめぐる様々なトピックについて、合計17件の研究発表が行われた。また、本会議ではNeil Feit氏とJeff McMahan氏による基調講演も行われた。

2. 報告者による発表の内容

報告者は二日目の早朝に、“Death, Deprivation and Counterfactual Semantics”（「死・剥奪・反事実条件文意味論」）という題目で発表を行った。発表の概要は以下の通りである。

なぜ、そしてどの程度死は死ぬ当人にとって悪いのか。この問いに対する答えとして現在有力視されているのは、「剥奪説（Deprivation Account）」と呼ばれる見解である。この見解によると、死が死ぬ当人にとって悪いのは、死が死ぬ当人から様々な善を剥奪するからであり、これらの善が剥奪される分だけ、死は死ぬ当人にとって悪い。そして先行研究では、剥奪説は様々な仕方で定式化されてきた。

本発表で報告者がまず示そうと試みたのは、剥奪説の既存の定式化には次のような深刻な困難があるということである。すなわち、これらの定式化は「死は死ぬ当人にとってまったく悪くない」という反直観的な含意を有している、という困難である。剥奪説の既存の定式化がこの困難を抱えていることを示すために、報告者は「最短時間論証（The Shortest Time Argument）」を提案した（本報告書では論証の内容は割愛する）。

それでは、剥奪説をどのように定式化すればこの困難を回避することができるのだろうか。この問いに答えるために、申請者は反事実条件文の意味論に着目した。申請者の考えでは、剥奪説の既存の定式化が上述した困難を抱えているのは、これらの定式化が反事実条件文の標準的な意味論に基づいているからである。しかし反事実条件文の意味論に関する近年の研究では、標準的な意味論が抱える様々な困難が指摘されており、これらの困難を踏まえてCory Nicholsは代替的な意味論を提案している。報告者は、剥奪説は（標準的な意味論ではなく）Nicholsの代替的な意味論の観点からも定式化することができ、この新しい定式化であれば上述した困難を回避できると論じた。

3. 参加の成果

報告者の発表に対しては様々な角度から質問が寄せられた。とりわけ、Neil Feit氏やJeff McMahan氏、Jens Johansson氏、Michael Cholbi氏など、死の哲学の第一線で活躍する研究者らから非常に鋭い質問をいただいた。報告者は本会議に先立ち日本国内でも同様の趣旨

の発表を行ったが、本会議で受けた質問はどれも国内の発表の際には出なかった新しい質問であった。これらの質問を踏まえつつ、報告者は自身の研究をブラッシュアップし、近日中に査読付きの国際誌に投稿する予定である。

また本会議では、報告者は多くの研究者と意見交換を行うことができた。とりわけ、申請者が以前から関心をもっていた Jeff McMahan 氏の研究について本人に直接質問をすることができ、死の哲学についての理解をさらに深めることができた。

本会議を通じて、死の哲学における最新の研究について多くの知見を得ることができ、国際会議で発表することの意義をますます実感することができた。しかし同時に、報告者がより英語を話すことができると感じる場面が多々あり、英語を話す能力を向上させることの重要性を身に染みて実感することができた。

4. 謝辞

今回の渡航は報告者の今後の研究にとって非常に有意義なものでした。このような機会を与えてくださった貴財団に心より感謝申し上げます。